岡藩の唐津城番について

竹田市立図書館長
北村清士

江戸時代の初期、慶長から慶安・承応頃までは幕府の対大名政策の一環として、盛んに国除・改易の行われたことは、人のよく知る所である。我が岡藩も当時その改易に際して、九州各地で城番を命ぜられ、城の受取りに出陣した。

城受取の大任には物心両面で並々ならぬ苦悩を喫したようである。その城番は寛永九年の熊本城（加藤忠広）、同十一年の府内城（竹中采女）、正保四年の唐津城（寺沢兵庫頭賢高）、享保元年の中津城（小笠原酒造之助）と都合四回も出陣した。城番は事実上の城受取りだから、手安く尋常に引渡すと限つていない。場合によつては強い抵抗もあり得るので、出陣に当つては相当の覚悟を必要とせざるを得ない。以上四回の出陣の場合、その兵員は約三千人を動員したようである。尤も熊本城の時は五千余人の出陣であつた。今、茲に唐津城の受取りに出陣した状況を記して参考に資したい。

正保四年丁亥（一六四七年）十一月二十四日。肥前国唐津城主寺沢兵庫頭賢高は、江戸に於て酒狂の上自殺した。依つてその城番を仰せ付られ、岡藩第二代の中川内膳正久盛公は、十二月廿九日右受取りのため岡城を出駕された。明けた翌五年は慶安と改元、同二年己丑まで一年九ケ月勤番していたが、同年九月六日大久保加賀守忠秀が改めて城主となつたから、同十日引渡して、即時帰城した。総員家老格二十五名、藩士三千名が三番手に分れて出陣した。

一番

中川藤兵衛、中川内近、中川喜太郎、熊田治右ヱ門（横目）秋岡吉左ヱ門、丸山小左ヱ門、中川安太夫、古田三十郎、小嶋兵左ヱ門、池田仁左ヱ門（横目）菅杢之助

二番

中川頼母、桜井重左ヱ門、中川長右ヱ門（横目）松山武兵衛、吉田六左ヱ門、池田孫三郎、阿坂弥兵衛、那須安左ヱ門、森田半右ヱ門、井上与左ヱ門（横目）塩山加兵衛

三番

中川又左ヱ門、武部主膳（横目）永田九左ヱ門、萱野助左ヱ門（横目）桜井勘之亟、三宅長兵衛、長尾助之亟、奈良四郎左ヱ門、松野三郎左ヱ門

御城番の上使は兼松弥五左ヱ門正直、御目付役は斉藤左源太利政および津田平左衛門正方で相役は水谷伊勢守勝隆である。

使番

安威儀太夫、安威右近右ヱ門、大岩市之亟、大岩市十郎

同晦日久盛公は御出馬

旗二十本　下村　弾右ヱ門
鉄砲廿挺　中　川　助之進
同　廿挺　柘　植　平九郎
同　廿挺　木村七郎右ヱ門
同　廿挺　下石　勘右ヱ門
同　八兵衛

同　廿挺　　菅　久　右ヱ門
同　　同　次郎兵衛
長柄百本　　三宅　覚右ヱ門
玉薬奉行　　林　権右ヱ門
同　　吉岡　伝右ヱ門
弓二十張　　野　尻　半兵衛
同　　奥田　治右ヱ門
傍筒十挺　　中　川　左　門
右　同断　　古沢九郎右ヱ門
右　同断　　小林　源左ヱ門
右　同断　　萱野　五右衛門

此次二十廻り

久盛公旗本　　徒者　四十人

使者五人

樋口佐左ヱ門、上島兵太夫、三宅覚兵衛、下村次郎右ヱ門、太田源右衛門（病気）

扈従十人

武藤平九郎、萱野一角、佐久門平兵衛、村治小左ヱ門、山田左兵衛、辻平七、成田平八、長尾弥三郎、田近亦四郎、前島彦太郎

伽者二人

曽我清吉、大畑正元

納戸奉行進野弥左ヱ門

大小性二組十三人

安西久兵衛、村上五郎右ヱ門、野尻伝兵衛、仲山清太夫、塩山五郎右ヱ門、弓木善兵衛、青木孫左ヱ門、井伊藤左ヱ門、白仁半左ヱ門、平手清兵衛、乃川治左ヱ門、福田半右ヱ門、丹羽源左ヱ門、

銀奉行二人

沢儀左ヱ門、村治源兵衛

膳奉行二人

鵜飼惣右ヱ門、上島太郎左ヱ門

祐筆役勤三人

松山平左ヱ門、粟屋十郎右ヱ門、塩山市郎左ヱ門

此跡馬廻り一組

一番

中川左近、小島三郎右ヱ門、本木惣兵衛、草刈孫兵衛、佐野藤左ヱ門、草刈七郎兵衛、水原清右ヱ門、安西猪右ヱ門、秋岡覚右ヱ門（横目）、熊田弥五左ヱ門

二番

中川平右ヱ門、家原弥次兵衛、田近覚三ヱ門、野溝四郎兵衛、田近善右ヱ門、平尾三之助、三宅利兵衛、原田孫左ヱ門（横目）菅太郎兵衛

殿備

鉄砲三十挺　　中川　半左ヱ門
普請奉行　　右田　甚右ヱ門
　　大河原久左ヱ門

馬支配

祖父江忠右ヱ門、小羽藤太夫

一番小荷駄奉行

早川新兵衛、角田六郎右ヱ門

二番小荷駄奉行

下村三右ヱ門、古田五左ヱ門

兵糧奉行

幡本甚之亟、森本七右ヱ門

右同

村治弥右ヱ門、森村四郎右ヱ門

宿取

上島源太夫、岡新左ヱ門、宗像太郎左ヱ門、進藤甚兵衛、小島彦左ヱ門、安藤市左ヱ門、吉村市郎左ヱ門、土屋与左ヱ門、進藤次太夫

跡立

中川玄蕃、三宅吉兵衛、横田惣十郎、池田甚左ヱ門、古沢惣左ヱ門

家中、陪者

中川平右ヱ門騎馬

田近半右ヱ門、中村伝兵衛、三宅清左ヱ門、大橋藤左ヱ門、柏原孫左ヱ門

中川頼母騎馬

岩田市左ヱ門、野上覚左ヱ門、古屋孫兵衛、橋本半左ヱ門

中川藤兵衛騎馬

中島与三右ヱ門、粟屋茂兵衛、中島孫左ヱ門

中川亦左ヱ門騎馬

宇野次郎左ヱ門、岡田九郎兵ヱ

中川左近騎馬

松岡伊兵衛

中川玄蕃騎馬

中島覚右ヱ門

岡之城留守居

中川平右ヱ門組

那須与兵衛、芹川権太夫、小佐井重兵衛、池田源之亟、高山助右ヱ門

中川頼母組

太田源右ヱ門、池田孫平次、佐曽利六右ヱ門、嶋亀右ヱ門、同藤四郎

中川藤兵衛組

高畠彦四郎、藪田六兵衛、同文左ヱ門、伊藤太郎右ヱ門、平井久馬之亟、塩山弥次右ヱ門

中川亦左ヱ門組
熊田三太夫、三宅平左ヱ門、上嶋左近右ヱ門、辻太郎右ヱ門、井上松右ヱ門、阿坂左太右ヱ門
中川左近組
田伏弥五兵衛。田伏市郎右ヱ門、岸伝兵衛、本江加右ヱ門、戸伏佐左衛門、茨木伊左ヱ門
中川左近組
徳蔵平太夫
古沢九郎右ヱ門組
山岸金左ヱ門
江戸留守居
八木勘左ヱ門、田能村李左ヱ門
江戸在番
赤座伊兵衛
三佐奉行
津山勘右ヱ門
城代
武藤伊織
賄頭
三宅内右衛門
さて明けて翌年正月三日先備の部署は、肥前国伊万里に到着、御旗本を待ち四日・五日同所に逗留、十日唐津城を無事に受取

つた。城番は二の丸家老宅に住居し、御目付等は二の丸の侍宅へ入つた。其の他の部下は侍二人に足軽二十人を差添へ屋敷々々に行き、屋番の町人を呼び出して分宿した。ウサンの所へは鉄砲頭・足軽を差添へて勤番するという物々しさであつたが、不埒者は断罪に処した。しかるに、慶安二年九月大久保加賀守忠季が改めて唐津城主八万石拝領にて江戸から下向した。

そこで九月六日一同唐津を出発して、帰国の途についた。先手は家老中川平右ヱ門、中川又左ヱ門、中川左近で、中川藤兵衛は居残りで残務の処理をとつた。帰路は太宰府に参拝して、無事大任を終つたことを祝福した。慶安四年二月十二日になつて唐津御城番中の収納、口米、種貸払銀の内、拾三貫六百六匁八分を江戸勘定奉行から大久保加賀守へ当藩に対し支払の仰出があつたので、大久保加賀守の家来は早速その銀子を持参した。大略以上の通りで無事大任を果したものの、中には町中を巡視中、定を出して不敬の奴もあつたから引捕えて町中を引廻して衆人に見せしめにした。之れで人々が恐れをなしたという。この時唐津の旧藩士で岡藩士に新になつたものが二、三名あつた。その子孫は今尚連綿とつづいている。これなどは一面、城番に当つた藩士の徳になついたものとも考えられるのである。